

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第71集

菌場堤跡（槇島町外他）
矢落遺跡（宇治蔭山10-1）

2008

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第71集

菌場堤跡（槇島町外他）
矢落遺跡（宇治蔭山10-1）

2008

宇治市教育委員会

序

宇治市の北西域、宇治川下流の槇島や小倉地区には、豊かな水田景観が広がっています。この水田地帯は、かつて北山城と南山城とを分けた巨椋池の跡であり、干拓完了は昭和16年のことでした。歴史を振り返れば、宇治はこの沼沢地と宇治川の恵みを受けて発展を続けてきたといえます。

平安時代には、平等院や藤原氏の別業が宇治川や巨椋池に臨んで建てられ、藤原道長が都から船で巨椋池を経て宇治に訪れたことは、記録に残されているところです。この当時、宇治川は宇治橋下流で巨椋池へと注ぎ込んでいました。そして、宇治川を池から分離したのが豊臣秀吉による太閤堤の築造であり、現在の川筋はこの時にさかのぼります。

さて、本報告に収録しました藪場堤跡は、巨椋池周囲に造られました堤跡であり、矢落遺跡は平安時代の貴族別業かと推定されている遺跡であります。今回の発掘成果につきましては、本書に詳しく述べたところであり、本市の豊かな歴史解明の一助になればと考えます。

末筆になりましたが、この発掘調査の実施にあたってご理解とご協力をいただきました関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成20年3月

宇治市教育委員会
教育長 石田 肇

例 言

1. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第 71 集である。
2. 本書収録の遺跡は、平成 19 年度に本市教育委員会が実施した発掘調査 2 件である。
3. 本書で使用する座標は、I T R F（国際地球基準座標系）に準拠した世界測地系国土座標第 VI 系を用い、地図中で方位記号の指し示す方角は、座標北である。また、高さの基準面には、東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
4. 本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色標監修）第 24 版（2002 年度）に拠った。
5. 本書に収録する遺物写真は、寿福写房（代表 寿福 滋）に委託した。
6. 本発掘調査事業に係る機関・体制は、下記の通りである。

発掘調査主体者	宇治市教育委員会		
発掘調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	石田 肇
発掘調査事務局	同 歴史資料館	館 長	吉水利明
発掘調査担当者	同 文化財保護係	係 長	杉本 宏
	同	主 査	荒川 史
	同	調査員	永野宏樹
	同	調査員	横田真吾
発掘作業委託	NPO 法人文化財支援センター		
	同	発掘技術員	河野凡洋
	同	計測技術員（藪場堤跡）	吉岡真史
	同	計測技術員（矢落遺跡）	浅川永子
	同	作業員長（藪場堤跡）	鎌田利幸
	同	作業員長（矢落遺跡）	奥戸幸雄

7. 本書収録遺物の実測・製図は、下記の者が行った。
井口章代、加藤さやか、北澤英子、澤口結希、辻 菜摘、山村沙奈美、横田真吾
8. 本書の編集は、宇治市歴史資料館文化財保護係が担当し、実務と執筆は横田が行った。

	名称	調査地	調査原因	経費負担者	調査期間	調査面積
A	藪場堤跡	横島町外・ 月夜地内	道路建設	宇治市	平成 19 年 12 月 4 日～ 25 日	138㎡
B	矢落遺跡	宇治蔭山 10 - 1	保育所建設	宇治市	平成 19 年 7 月 3 日～ 10 日	58㎡

本文目次

A. 藪場堤跡(槇島町外他)発掘調査報告	
I. はじめに	
1 報告の目的	1
2 調査にいたる経過	1
3 調査の経過	1
II. 地理的・歴史的環境	
1 槇島の地理的環境	2
2 槇島の歴史的環境	2
III. 調査の成果	
1 検出遺構	4
2 出土遺物	4
IV. まとめ	
5	
B. 矢落遺跡(蔭山 10 - 1)発掘調査報告	
I. はじめに	
1 報告の目的	8
2 調査にいたる経過	8
3 調査の経過	8
II. 地理的・歴史的環境	
9	
III. 調査の成果	
10	
IV. まとめ	
10	

挿図目次

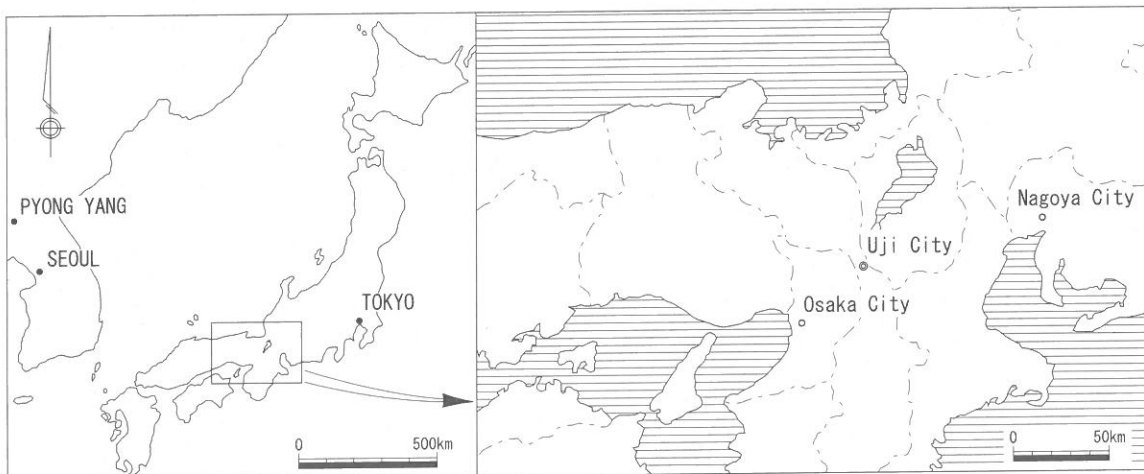
A. 藪場堤跡	
第1図 調査地位置図	1
第2図 調査区配置図	2
第3図 巨椋池と堤防(吉田 1962 を改変)	3
第4図 出土遺物	4
第5図 槇島堤断面中心部(北より)	5
第6図 大池堤断面図(吉田 1962 を改変)	5
第7図 槇島村破堤水損絵図	6
第8図 槇島村洪水絵図	7
B. 矢落遺跡	
第1図 調査地位置図	8
第2図 調査区配置図	9
第3図 出土遺物	10

図面図版目次

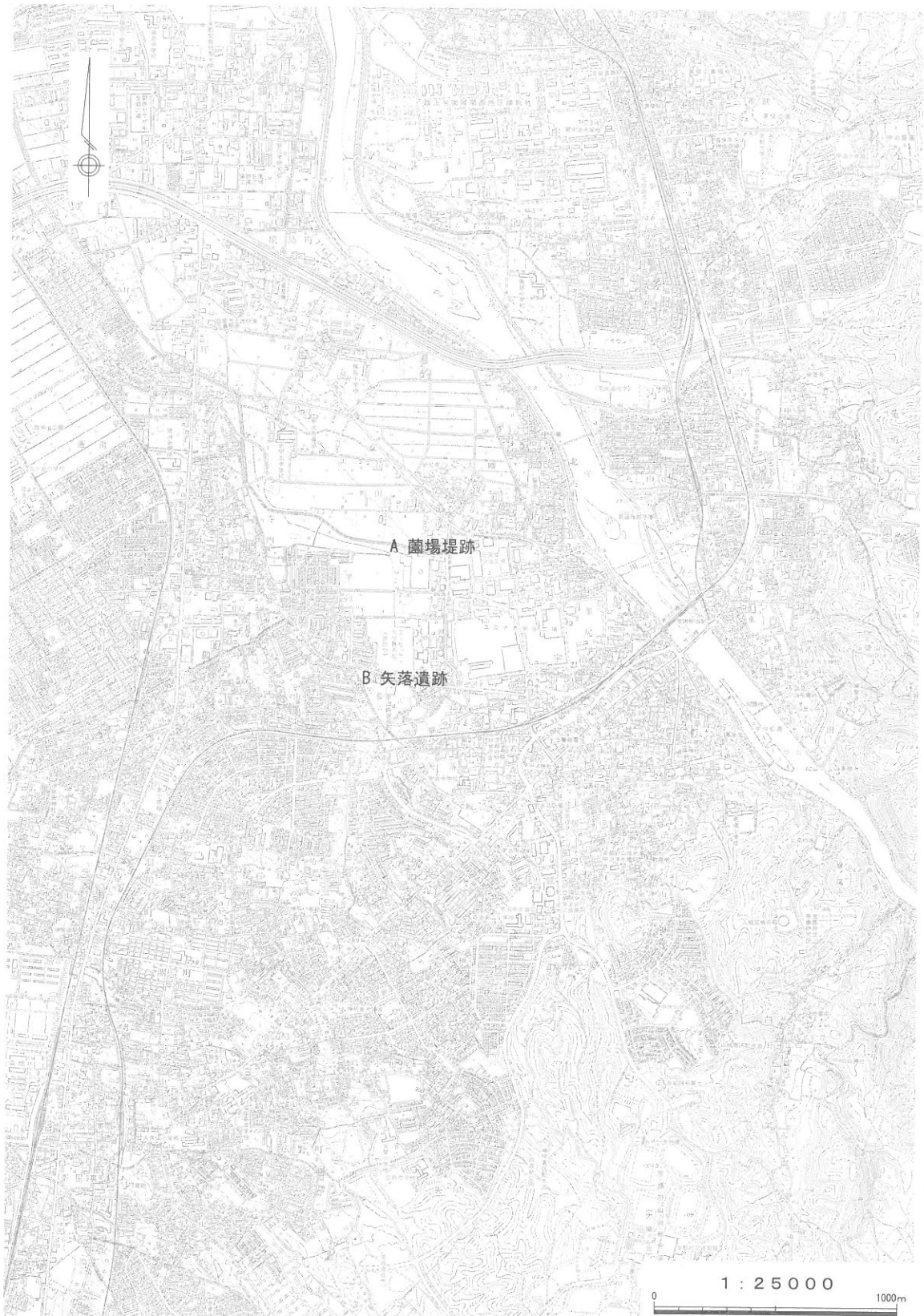
A. 藪場堤跡	
PL. 1 遺構平面・土層断面図	
PL. 2 土層断面・堤防立面図	
B. 矢落遺跡	
PL. 3 遺構平面・土層断面図	

写真図版目次

A. 藪場堤跡	
PL. 4 第1調査区(西より)	
PL. 5 第1調査区(東より)	
PL. 6 第2調査区(東より)	
PL. 7 第2調査区(西より)	
PL. 8 遠望・参加者・遺物	
B. 矢落遺跡	
PL. 9 完掘状況と土層断面	



宇治市の位置



作図にあたっては、昭和55年7月測図、平成2年2月修正の宇治市全図1 (1/10000) を改変して用いた。

本書所収の遺跡位置図

A. 菌場堤跡(槇島町外他)発掘調査報告



I. はじめに

1 報告の目的

本発掘調査報告は、宇治市槇島町外・月夜地内で計画された都市計画道路建設に先立ち、宇治市教育委員会が実施した発掘調査の内容と成果を報告するものである。

2 調査に至る経過

平成 18 年 1 月 31 日付で宇治市長久保田勇より、藪場堤跡の範囲にある上記の地番内において、文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、都市計画道路建設を行う旨の埋蔵文化財発掘の通知が提出された。その後、平成 18 年 2 月 17 日付で京都府教育委員会から発掘調査実施の通知を受け、宇治市建設部との協議を行う中で、宇治市歴史資料館が発掘調査を行うこととなった。

3 調査の経過

当該地は、槇島から小倉へと続く小道の一部であり、この道がかつての藪場堤の名残であることから、発掘調査を実施した。調査前の当該地は、道路と駐車場であった。調査は、まず平成 19 年 11 月 28 日に道路側へ第 1 調査区の設定を行い、12 月 4 日から重機による掘削を開始した。掘削深度は、洪水堆積層の最下部、約 2 m までである。遺構は検出されなかったが、東西の壁ともに南から北へ上がる土砂堆積を確認した。そのことから、第 1 調査区北側には堤跡など何らかの高まりがあると判断したため、駐車場側へ新たに第 2 調査区を設けた。12 月 5 日、第 1 調査区の全景写真を撮影し、その埋め戻し後、10 日より第 2 調査区の重機掘削を開始した。洪水堆積層を取り除くと、まもなく下から堤跡とみられる高まりを検出したため、その状態を確認すべく調査と記録作業を実施した。調査終了日は 12 月 25 日で、終了後に現状復旧を行った。



第 1 図 調査地位置図

II. 地理的・歴史的環境

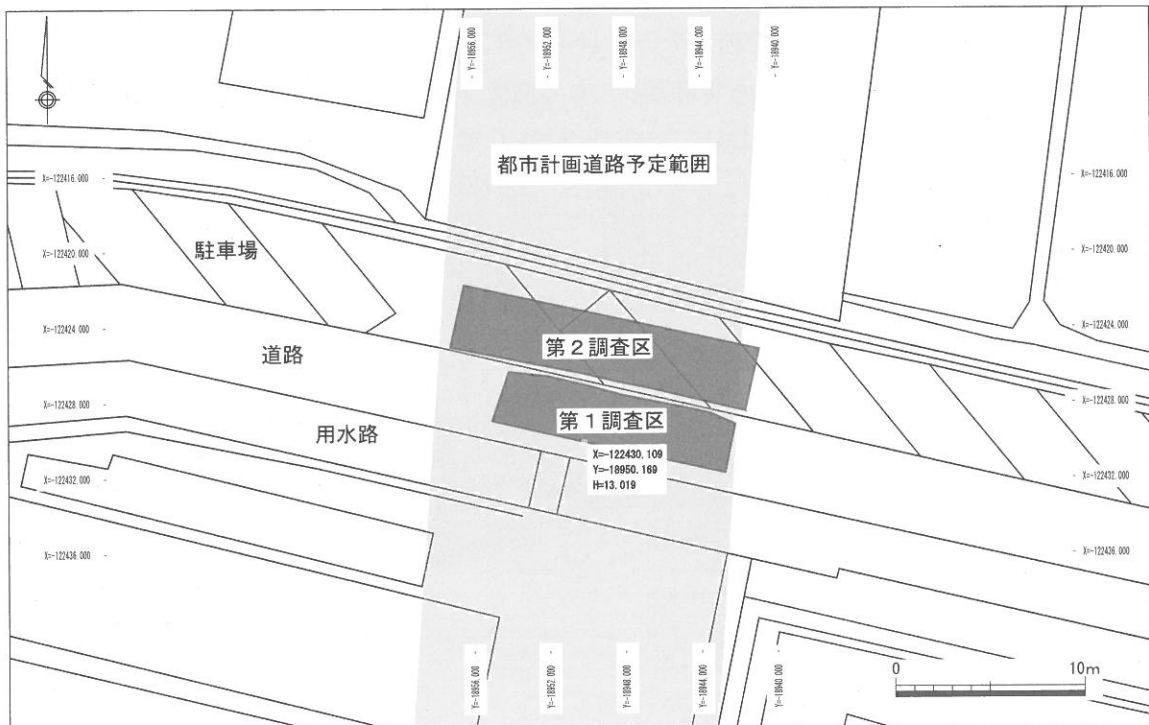
1 槇島の地理的環境

琵琶湖から流れ出た瀬田川は、京都に入るところ宇治川と名を変え、宇治を北へと貫流してゆき、大山崎で桂・木津川と合流し、淀川となる。宇治川は、現在の宇治橋よりやや北側で傾斜が緩くなっており、この付近に比重の高い土砂が溜まっていったが、槇島はそうして運ばれてきた土砂により形成された中州であった。

巨椋池や宇治川等に囲まれた槇島は、その名が示す通り古来島だったが、本来の自然堤防に加え、文禄3年（1594年）に豊臣秀吉によって築かれた小倉や槇島の堤防によって周囲を囲まれ、輪中のような景観へと変貌を遂げた。また、昭和8年（1933年）より始まり、昭和16年（1941年）に完了した巨椋池の国営干拓事業によって、水辺が田畑へと変わると同時に、槇島は完全に陸と結ばれ、現在へ連なる地形となった。

2 槇島の歴史的環境

「槇島」という地名の起源については、急流が渦巻き流れるところの島という意味とする説や、宇治川右岸の朝日山麓に住んだ今来氏が開拓した島であるとして、今来の島が転訛したとする説、琵琶湖より宇治川を流されてきた材木が集積された場所、材木の島から真木島と名付けられたとする説などがある（若原1981）。



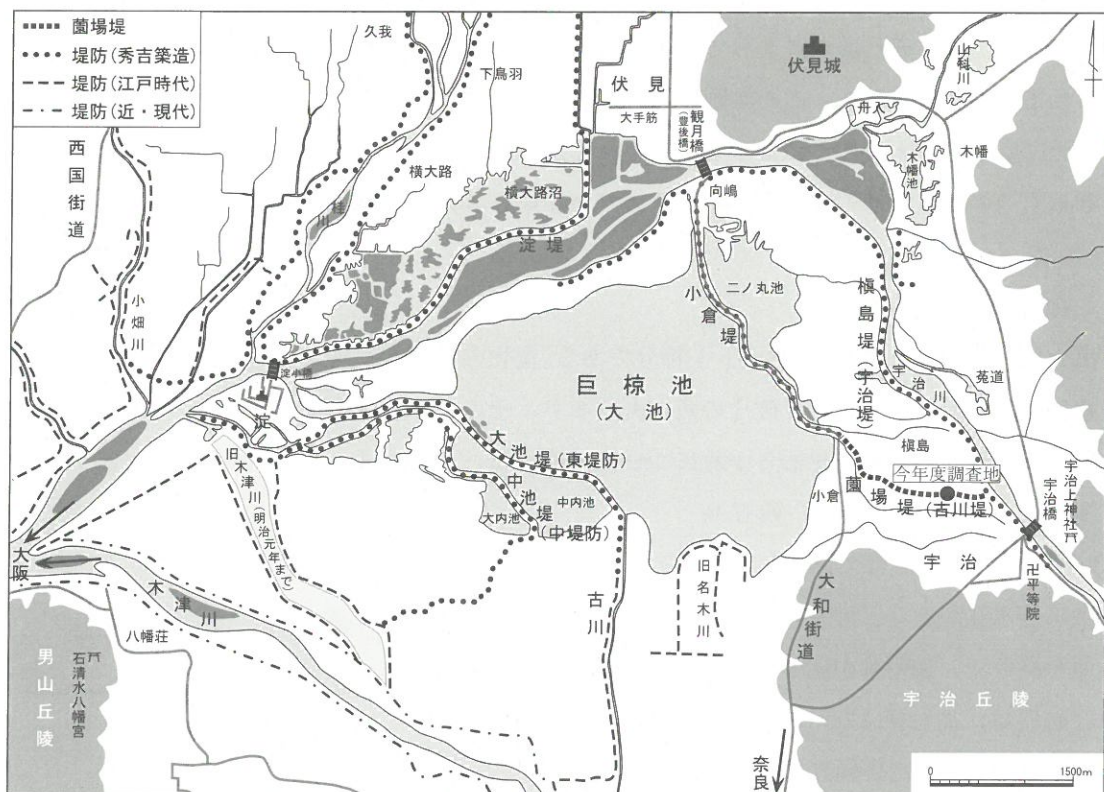
第2図 調査区配置図

槇島においては、古代以前の遺構が全く明らかでないものの、地図や写真に残る条里地割から、古代における開拓の様子を推察できる。中世になると、風光明媚なその土地柄から、仁治3年(1242年)西園寺公経によって真木島山荘(花亭)が造られた。伏見の指月・宇治の蔵勝庵とともに洛南三勝の一つに数えられる釣月庵も槇島にあったというが、双方位置などは不明である。

天正元年(1573年)には室町幕府最後の将軍、足利義昭が織田信長によって京都を追放され、室町時代は終焉を迎える。その舞台となったのが、槇島の浮城、槇島城である。ここは、以前から足利将軍の奉公衆であった真木島氏の本拠(槇島館)であったが、明応8年(1499年)細川政元により派遣された赤沢宗益が攻め落として以降、細川氏の城へと変貌を遂げた。城の正確な位置は不明であるが、いずこであれ周りを河流に囲まれた槇島城は、時の将軍義昭をして「是に過ぎたる御構これなし」(『信長公記』巻6)と言わせるほど、防御の適地に構えていた。

槇島城は、文禄3年(1594年)豊臣秀吉による伏見城と堤築造のため破却され、その石や土が利用されたという。藪場堤も秀吉によって築造されたとする説や、それ以前に槇島城主の真木島玄蕃頭昭光が築造した玄蕃堤の一部であるという伝承も存在する。「槇島村明細帳写」(『上林牛加家文書』)には、「古川通」の築堤を元和元年(1615年)とする記事を載せる。

藪場堤のほか、巨椋池周辺の堤防には、宇治川左岸沿いの「槇島堤」や淀川沿いの「淀堤」、巨椋池の北東、向島から小倉までの「小倉堤」、南西の北川顔から安田までの「大池堤」、北川顔から田井までの「中池堤」がある。これらは太閤秀吉の築造とされることから、一般的に太閤堤やその年代より文禄堤と呼ばれるが、単に太閤堤と言った場合、小倉堤を指すこともある。



第3図 巨椋池と堤防(吉田1962を改変)

Ⅲ. 調査の成果

1 検出遺構

第2調査区で洪水による土砂堆積層を除去した結果、堤防跡1基を部分的に検出した。当該地の基本層序は、①近現代の整地層、②洪水の堆積層、③旧宇治川の堆積層からなっている。調査地は、第1・2調査区ともに洪水によって運ばれてきた土砂が最大で約1.2m堆積する。

堤体は、主に宇治川支流の堆積によって形成された自然堤防を利用したもので、第2調査区の西端で行った堤体の断ち割りからは、胎土が精良な土師器小片が出土している。この土師器によって、自然堤防が形成された時期は、古墳時代以降ということがわかる。堤の最上部には、旧宇治川の堆積層とは明らかに質が異なる灰オリブ色の粘質土（第40層）が乗っており、堤防を構築した際の盛土が一部遺存したものの可能性が考えられる。

堤防跡の残存状況は良くない。堤体主軸は、座標北より96度東偏する東西方向の直線であるが、度重なる洪水の影響によって、堤体自身は不定形なものとなっている。堤体の残存高は、調査区の下部より約0.7mから1.1m、堤体底部の残存幅は、第1・2調査区両西壁の傾斜変化点より計測すれば4m以上となる。

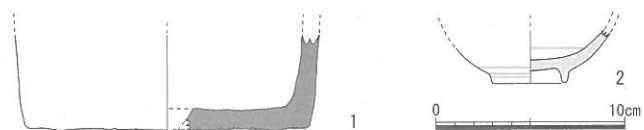
堤防は、調査区外の東西両方へ延びており、堤体の北側斜面には2段の段差が見られる。段が西から東へと下がっていることや第2調査区西壁の洪水堆積層（第42層）が下段と対応し、洪水堆積層（第12層）が堤体と下の第42層を削り込んでいる状況から、この上下段は人工的なものではなく、それぞれ洪水によって形成されたものであろう。

これまでのところから、この堤防跡は、巨椋池へと流れ込む旧宇治川の支流が形成した自然堤防を元に盛土を加えることによって構築されたが、幾度かの洪水に被災することで変形、埋没し、おそらくその築造当初の姿はほとんど留めていないと考えられる。

2 出土遺物

出土した遺物は、コンテナバット1箱分である。遺物のほとんどは、近世の陶磁器片であったが、洪水によって流される過程で破片の角が丸くなり、その多くが図化に耐えない。ここでは、図化できた江戸時代の陶器と磁器各1片について記述する。

陶器は、底部径14.8cm、残存高5.0cmの植木鉢の底部である。低部中央に排水孔があり、排水孔と底部外面を除いて、透明釉が施されている。磁器は、高台径4.2cm、残存高2.8cmの染付けを内外面に施した碗の底部である。



1（第2調査区 15層〔洪水堆積層〕） 2（第2調査区 12層〔洪水堆積層〕）

第4図 出土遺物

IV. まとめ

1 発掘調査の成果

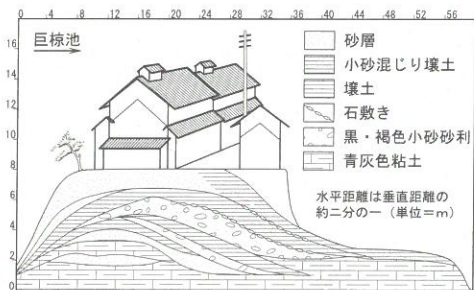
今回の発掘調査では、藪場堤と考えられる堤防跡一基を検出した。堤防の構築された年代については、堤体出土の土師器片より、古墳時代以降、近世以前としか限定できなかった。調査の主要な成果としては、これまで「太閤堤」とされてきたものには発掘調査された例がなく、今回初めて堤本体を確認し、その破損した状況を検出できたことを挙げられる。

藪場堤は洪水で破損しているとはいえ、堤体残存幅4 m強という数字から、堤体幅約30 mの太閤堤（槇島堤）と比べた場合、明らかに小規模とわかる。堤長と堤高を見ても、槇島堤は堤長5 km、堤高6 mを超えるのに対し、藪場堤は堤長約2 km、堤高3 m（大正11年段階）と槇島堤の半分以下であり、小倉堤と比べた場合でも、約半分の規模である。

規模だけでなく、構造にも目を向けてみよう。藪場堤の上部は盛土、下部については旧宇治川支流の堆積層をベースにしている。拳大の礫を積み上げ、それらを木杭で留めるといった堅固な構造体を中心部にもつ槇島堤とは、構築技術という点においても差異が認められる。しかし、同じ太閤堤でも大池堤は、槇島堤でみられたような構造体を中心部に持たない。



第5図 槇島堤断面中心部（北より）



第6図 大池堤断面（吉田1962を改変）

2 藪場堤と洪水

藪場堤自体は、槇島が長年外水に悩まされてきたことと同様に、幾度かの洪水に削られて当初からの姿を保っていないが、そのこと自身、宇治の災害史を考えていく上で重要である。

「古川通」における築堤記事にあるように、槇島村の中央部分には宇治川や宇治領から排水の難しい水がもともと流れ込んで来ていた。近世以降の史料に水害の様子を記すものは数多い。特に近世末ないし近代初めの慶応4年（1868年）5月に起こった大洪水は、「お釜切れ」として記録され、被災当時の悲惨な状況がいくつかの文書に残っている（『森下要恵家文書』、『木下利三郎家文書』）。そこでは、藪場堤だけでなく宇治川左岸の槇島堤も決壊し、槇島村の西、小倉村の家屋が多数流されたことを伝えている。

文書だけでなく、絵図にも堤防決壊の様子が残されている。宝暦7年（1757年）に描かれた『槇島村破堤水損絵図』（第7図）には、前年に起こった洪水後の様子や破堤箇所が示されており、そこに記された古川堤こそ、現在太閤堤【藪場堤】と遺跡に指定しているものに該当する。

IV. まとめ

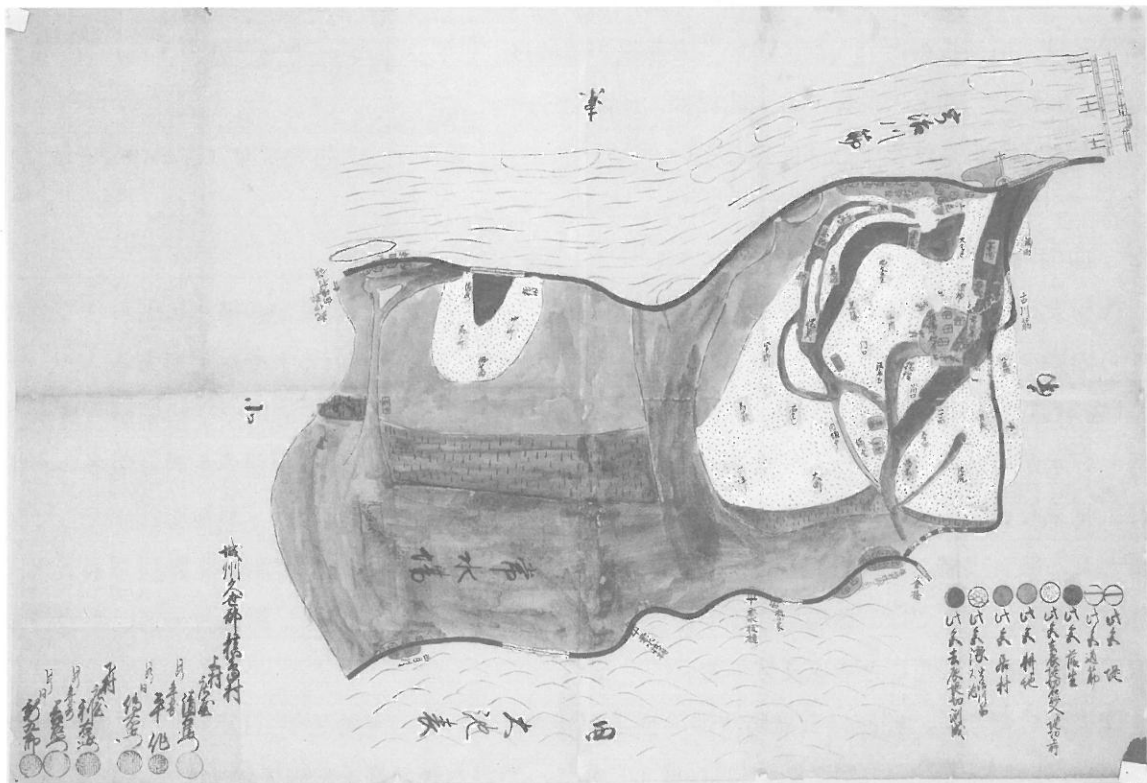
さらに、江戸時代後期の作といわれる『槇島村洪水絵図』（第8図）にも先の図と同様に洪水後の状況や藪場堤の決壊箇所が図示されており、同じく江戸時代後期、安政2年（1855年）の洪水後を描いた『大風雨城州洪水図』も槇島など宇治市域が罹災したことを伝えている。

このように、槇島は近世以降多くの水害を被ってきたが、洪水によって堤防が破損した状況を発掘調査で確認したのは初めてのことである。藪場堤は、大正15年（1926年）以降、ユニチカ（旧日本レイヨン）の工場建設の際、堤体が盛土材料として使われ消滅したという（若原1981）。しかし、大正11年測量の地形図には堤部分に「+3.0」（単位はm）と記されていることから、破堤しなかった箇所や修復が行われた箇所は、この頃まで確実に堤体が見えていた。

今回の調査で見つかった藪場堤は、1mほどの高さしか残っておらず、その上に洪水の堆積が認められる。そのことから、この場所は破堤箇所に該当し、いつ頃決壊したかは不明であるが、洪水の砂に覆われることで、破損した状況が現在まで保存されたと考えられよう。

参考文献

- 林屋辰三郎・藤岡謙二郎編 1974年 『宇治市史』 2 中世の歴史と景観
林屋辰三郎・藤岡謙二郎編 1976年 『宇治市史』 3 近世の歴史と景観
吉田敬市 1962年 「巨椋池の文化」 『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区
若原英弐 1981年 「宇治川の谷口」 『宇治市史』 6 宇治川西部の生活と環境



第7図 槇島村破堤水損絵図 宝暦7年（西暦1757年） 山田賀胤氏蔵

藪場堤関係史料

『上林牛加家文書』「槇島村明細帳写」

一、宇治川古川通

川長当村の内千三百五十間余
川巾凡平均九尺

右は川上古来水元宇治川、但し元和元卯年御築留

め当^(村)付 宇治川澱水又は宇治領よりの悪水等流

れ落ち申し候、川下大池落合い、夫より淀川へ出

で一同二流れ落ち申し候、但し洪水の節、旧の宇

治橋表より水惣越え、川下淀旧小橋表より逆上の

水にて一面^(港)堪え候場所御座候

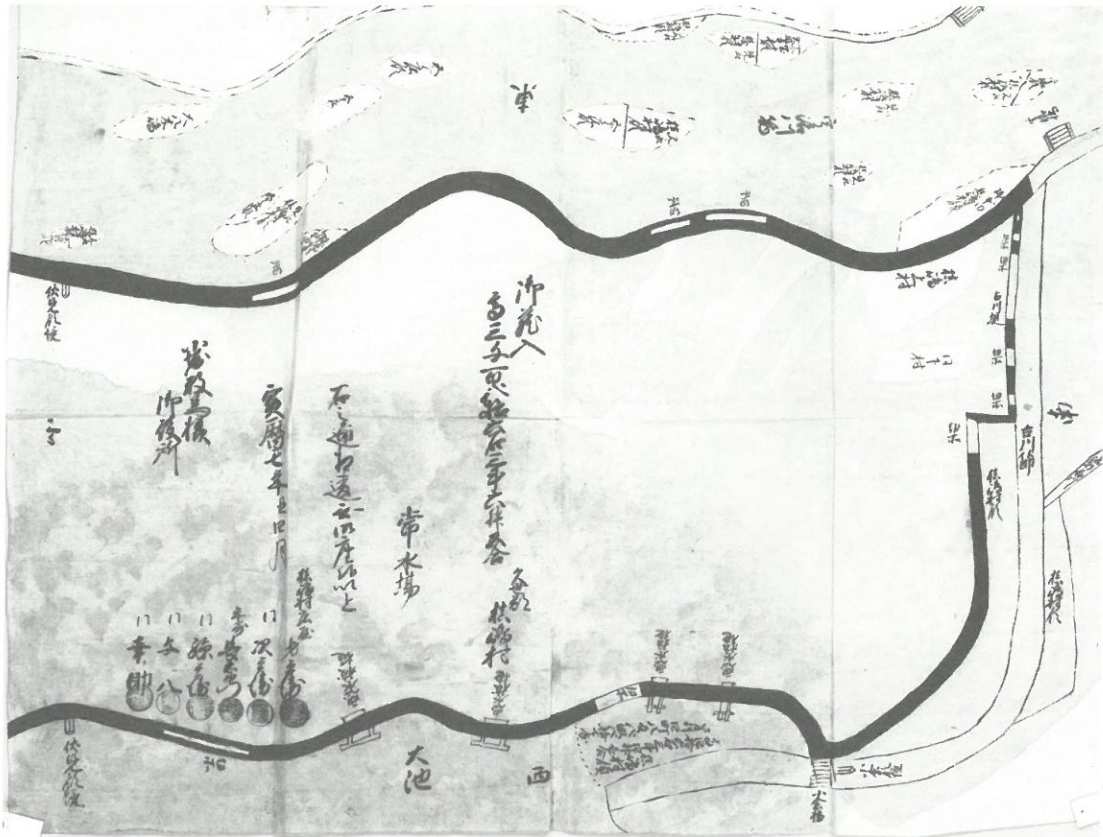
同川筋

一、川除堤延長千八拾貳間 平均敷拾間

馬踏五尺

右は往古より脇川御普請所にて、竹木御買上ケ御

扶持下され、仰せ付けられ候御普請所に御座候



第8図 槇島村洪水絵図 江戸時代後期 辻雅之氏蔵

B. 矢落遺跡(蔭山 10 - 1)発掘調査報告



I. はじめに

1 報告の目的

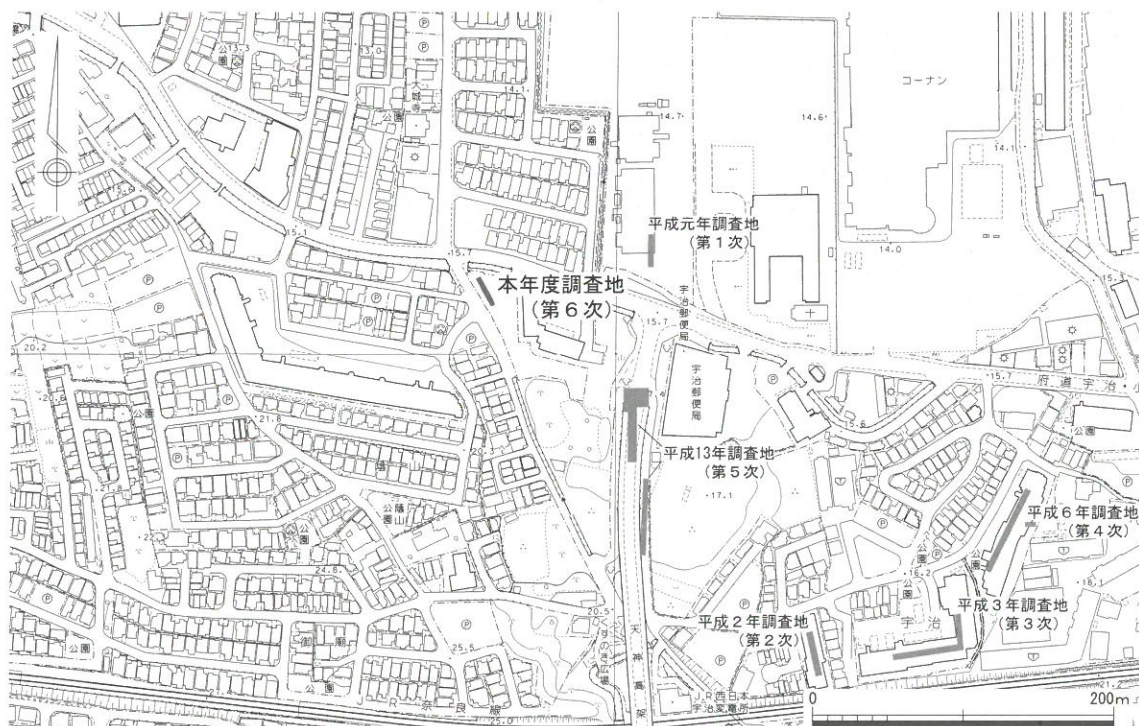
本発掘調査報告は、宇治市宇治蔭山10-1で計画された保育所建設に先立ち、宇治市教育委員会が実施した発掘調査の内容と成果を報告するものである。

2 調査に至る経過

平成19年5月7日付で社会福祉法人黎明会理事長山口昭雄より、矢落遺跡の範囲にある上記の地番内において、文化財保護法第93条第1項の規定に基づき、保育所建設を行う旨の埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該地周辺では、平成元・2・3・6・13年に発掘調査を行っており、その結果から当該地でも遺構の存在を予測していたため、発掘調査を実施した。

3 調査の経過

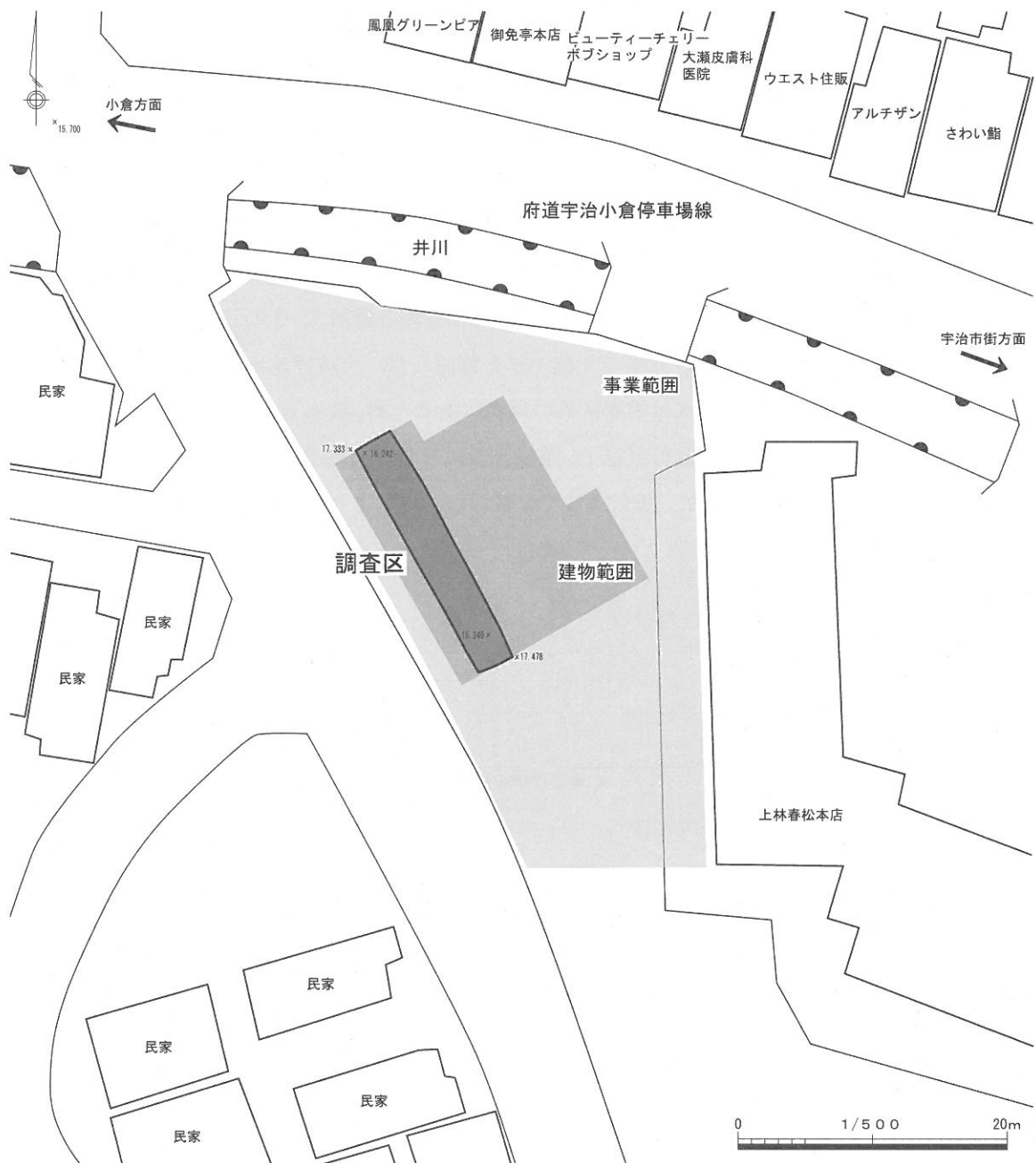
調査前の当該地は宅地で、調査区の設定と重機による掘削は7月3日から行った。掘削深度は、平均すると地表面より地山までの約1.5mである。地山は段丘礫層で、その地形は東から西へ下っていた。遺構検出の結果、調査区南端で土坑1基を確認した。土坑は地山直上の層から掘り込まれており、約2.1m掘削したが、底は調査区外の南西にあるため、最底辺までの深さは不明である。7月7日には、遺構掘削と写真撮影が完了、遺構測量は9日から始まり、当日中に作業を終えた。現地での全作業が終了した10日、調査機材等を整理し、現地より撤収した。



第1図 調査地位置図

Ⅱ. 地理的・歴史的環境

平成元年に行った発掘調査の結果から、今回の調査地北側は湿地であることが判明しており、その周辺が旧巨椋池の外縁であった。また、本調査地の南側では、平成13年に礎石建物跡や園池の洲浜を検出している。そこからは平安期の平等院鳳凰堂と同範の瓦が出土していることから、この周辺一帯は別業であった可能性が非常に高い。特に史料および地名の考証により、この場所は藤原摂関家の別業、「泉殿」と考えられている（杉本2006）。



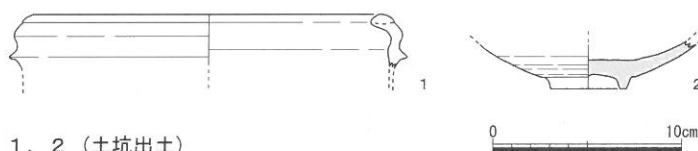
第2図 調査区配置図

Ⅲ. 調査の成果

調査区は、建設予定の保育所建物の範囲内に南北 19 m・東西 3 m と南北に長く設定した。ここは、平成 13 年に別業に伴うとみられる洲浜が検出された地点より約 100 m 北西の場所にあたり、当該地でも別業跡ないしその関連遺構を検出する可能性を考えていた。しかし、検出したのは調査区南端の土坑 1 基のみであった。検出した土坑は、黒褐色土より掘り込まれ、深さ 2 m 以上、その範囲は調査区外南西に続いている。基本層序は、上から現代の表土、年代不明の黒褐色土、拳大の礫を含む灰黄褐色の段丘礫層（地山）の順になっていた。

地山である段丘礫層は、東から西へと下っていた。しかし、この地形は本来のものではない。調査地南西の丘陵は、南西より北東へと緩やかに下っており、調査地においても同様の地形となるのが自然である。そうならないのは、調査地西側の折居川が現在の場所へ流路を人工的に変更された結果と考えられる。すなわち、調査区で見られる東から西への傾斜は、折居川の旧流路が廃された昭和 6 年（1931 年）頃に造られた比較的新しい地形なのである。

遺物で図化できた物には、土坑から出土した土師器羽釜の口縁部と白磁碗の底部がある。前者は口径 18.6cm、後者は高台径 3.9cm である。



1、2（土坑出土）

第 3 図 出土遺物

Ⅳ. まとめ

今回の調査では、土坑 1 基を検出した。想定していた別業関連の遺構などは検出しえなかったが、このこと自体、別業の範囲を考える上で意味がある。平成 13 年に洲浜を検出した箇所と本調査地との間が別業の境界とも考えられるためである。さらに、土坑より出土した鎌倉時代の土師器羽釜（13 世紀）や平安時代の白磁碗（12 世紀）の存在からも、南東の別業との関連に注意しなければならない。しかし、先述した折居川の流路変更など、当該地は後世の削平による土地改変を受けていることが明らかで、その具体像を明確にしかねる。

参考文献

- 宇治市教育委員会 1990 年 「1. 矢落遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 16 集
 同上 1992 年 「4. 矢落遺跡（矢落 34）発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 18 集
 同上 1992 年 「Ⅱ 矢落遺跡（矢落 23）発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 19 集
 同上 1994 年 「Ⅳ. 矢落遺跡第 4 次発掘調査概要」 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 25 集
 杉本 宏 2006 年 「Ⅴ 宇治のまちを発掘する」『宇治遺跡群』日本の遺跡 6 同成社

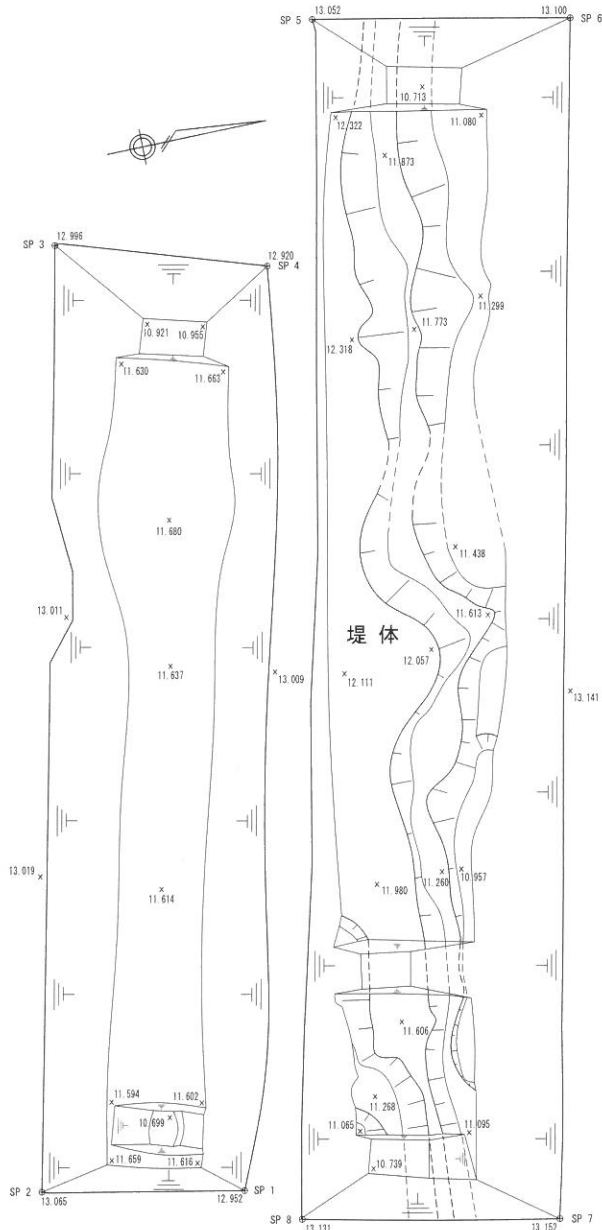
図面図版

A. 藪場堤跡

遺構平面・土層断面図…… P L. 1
土層断面・堤防立面図…… P L. 2

B. 矢落遺跡

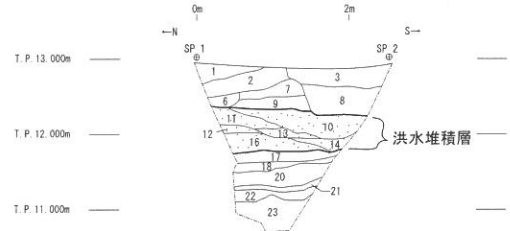
遺構平面・土層断面図…… P L. 3



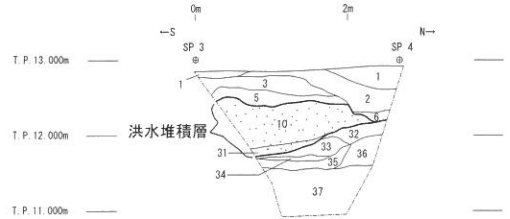
第1調査区 第2調査区
調査区平面図

第1調査区

東壁断面図

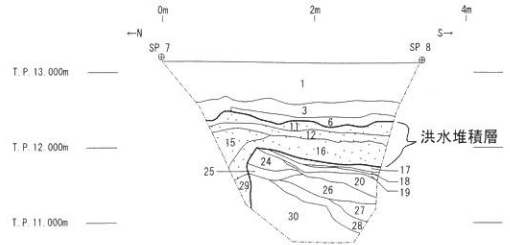


西壁断面図

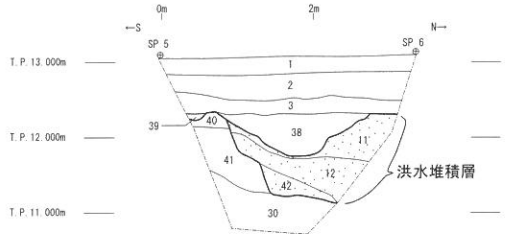


第2調査区

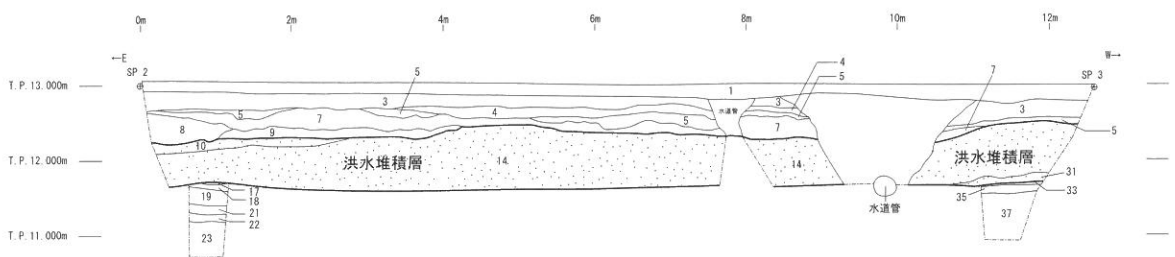
東壁断面図



西壁断面図



第1調査区 南壁断面図

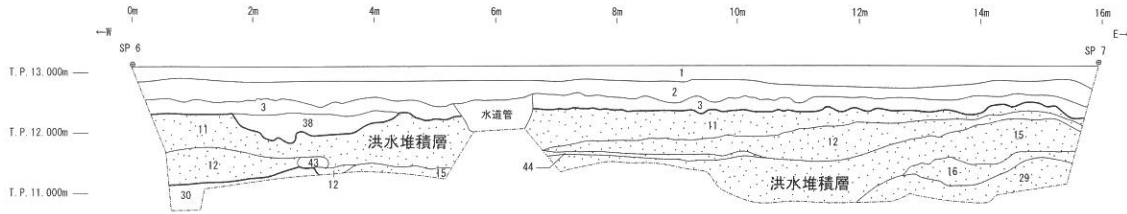


0 5m
S=1/100

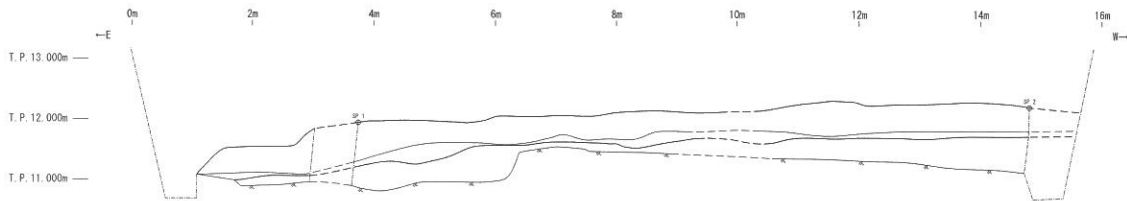
P.L. 2 土層断面・堤防立面図

藪場堤跡

第2調査区 北壁断面図



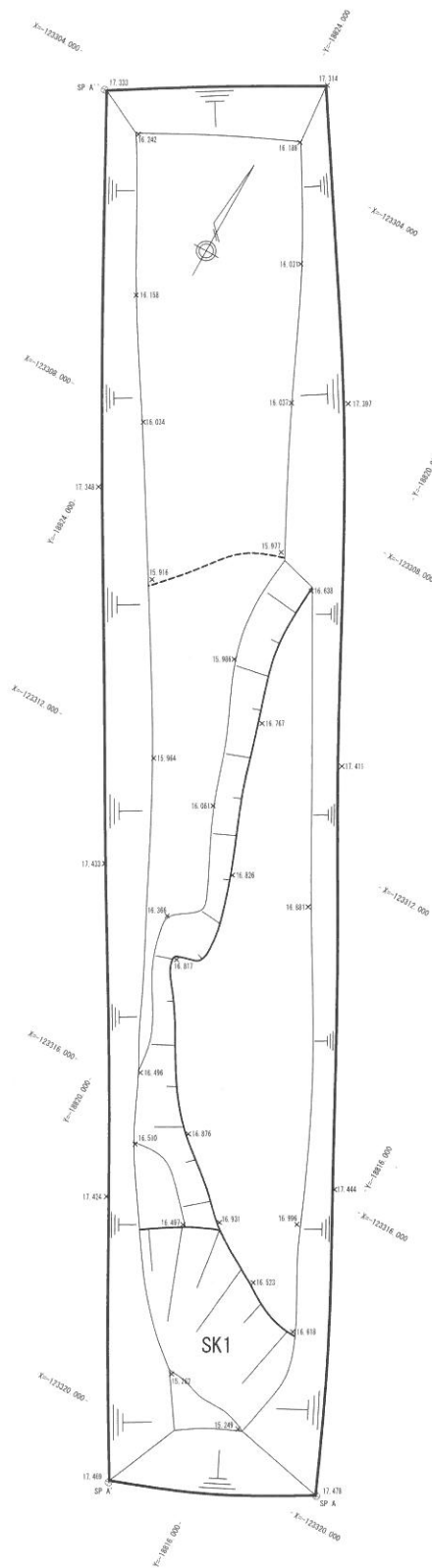
第2調査区 堤跡立面図



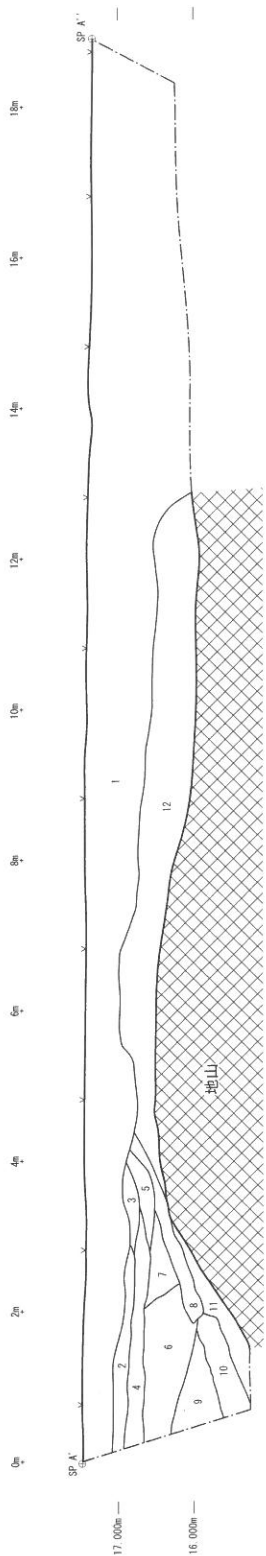
- | | |
|----|--|
| 1 | 現代整地土層 (アスファルト) |
| 2 | 現代整地土層 |
| 3 | 現代整地土層 |
| 4 | 現代整地土層 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 粗砂土 φ1.0cm~7.0cm程の礫5%含む |
| 5 | 現代整地土層 5Y5/1 灰色 粘質土 φ1.5cm~5.0cm程の礫3%含む 粗砂混じる |
| 6 | 現代整地土層 2.5Y5/2 暗黄灰色 シルト質土 φ0.5cm~3.0cm程の礫2%含む |
| 7 | 現代整地土層 2.5Y5/4 黄褐色細砂土 φ1.0cm~5.0cm程の礫2%含む |
| 8 | 現代整地土層 2.5Y4/4 オリーブ褐 粘質土(土坑) φ0.5cm~5.0cm程の礫5%含む |
| 9 | 現代整地土層 5Y5/1 灰色 粘質土 板状鉄分1%含む |
| 10 | 洪水堆積層 2.5Y8/1 灰白色 粗砂土 φ1.5cm~5.0cm程の礫8%含む 板状鉄分1%含む |
| 11 | 洪水堆積層 2.5Y7/1 灰白色 粗砂土 |
| 12 | 洪水堆積層 2.5Y7/2 灰黄色 細砂土 |
| 13 | 洪水堆積層 2.5Y7/2 灰黄色 粗砂土 |
| 14 | 洪水堆積層 2.5Y8/1 灰白色 粗砂土 φ1.0cm~5.0cm程の礫5%含む 板状鉄分1%含む |
| 15 | 洪水堆積層 5Y8/1 灰白色 粗砂土 |
| 16 | 洪水堆積層 2.5Y6/2 灰黄色 細砂礫土 |
| 17 | 旧宇治川堆積層 10Y5/1 灰色 シルト質土 |
| 18 | 旧宇治川堆積層 2.5Y2/1 黒色 粘質土 |
| 19 | 旧宇治川堆積層 5Y4/1 灰色 シルト質土 板状鉄分5%含む 細砂混じる |
| 20 | 旧宇治川堆積層 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粘質土 炭化粒1%含む |
| 21 | 旧宇治川堆積層 10Y4/1 灰色 粘質土 |
| 22 | 旧宇治川堆積層 7.5Y5/1 灰色 シルト質土 |
| 23 | 旧宇治川堆積層 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘質土 |
| 24 | 旧宇治川堆積層 2.5Y5/1 黄灰色 シルト質土 炭化粒1%含む 粒状鉄分1%含む |
| 25 | 旧宇治川堆積層 2.5Y6/1 黄灰色 シルト質土 粒状鉄分3%含む |
| 26 | 旧宇治川堆積層 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂土 板状鉄分3%含む |
| 27 | 旧宇治川堆積層 2.5Y6/1 黄灰色 粘質土 炭化粒1%含む 粗砂混じる |
| 28 | 旧宇治川堆積層 5Y5/1 灰色 粘質土 粒状鉄分3%含む |
| 29 | 洪水堆積層 2.5Y7/1 灰白色 粗砂土 |
| 30 | 旧宇治川堆積層 5Y5/2 灰オリーブ色 シルト質土 炭化粒2%含む |
| 31 | 洪水堆積層 5Y4/1 灰色 シルト質土 |
| 32 | 旧宇治川堆積層 2.5Y 暗黄灰色 粘質土 φ0.5cm~1.0cm程の礫5%含む |
| 33 | 旧宇治川堆積層 7.5Y4/1 灰色 シルト質土 炭化粒2%含む |
| 34 | 旧宇治川堆積層 2.5Y7/1 灰白色 粗砂土 |
| 35 | 旧宇治川堆積層 5Y2/2 オリーブ黒色 粘質土 |
| 36 | 旧宇治川堆積層 2.5Y6/2 黄灰色 砂質土 |
| 37 | 旧宇治川堆積層 10Y4/1 灰色 粘質土 細砂混じる |
| 38 | 近代整地土層 |
| 39 | 洪水堆積層 2.5Y8/2 灰白色 粗砂土 |
| 40 | 近世盛土か 5Y5/2 灰オリーブ色 粘質土 φ1.0cm~5.0cm程の礫5%含む 硬くしまる |
| 41 | 旧宇治川堆積層 5Y6/2 灰オリーブ色 シルト質土 炭化粒1%含む |
| 42 | 洪水堆積層 2.5Y8/1 灰白色 細砂土 |
| 43 | 近世盛土か 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土 |
| 44 | 洪水堆積層 5Y6/2 灰オリーブ色 シルト質土 |



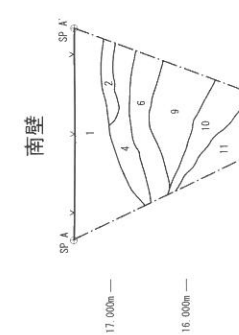
平面図



断面図



- 南壁
- 1 (南側) 7.5YR7/1明褐色砂質土に7.5YR5/1褐色砂質土混じる(大礫多く含む)
 - (北側) 7.5YR4/4褐色 砂質土、7.5YR5/4にふい褐色砂質土に10YR3/3暗褐色砂質土混じる(水分、炭化物含む、大礫多く含む)
 - 2 10YR4/4褐色 砂質土 (やや水分含む)
 - 3 10YR5/3にふい黄褐色 砂混じり粘質土
 - 4 10YR4/6褐色 砂質土 (やや水分含む、やや粘性あり、やや水分含む)
 - 5 10YR4/3にふい黄褐色 砂質土 (やや水分含む)
 - 6 10YR4/4褐色 砂混じり粘質土 (やや水分含む、φ3cm次の礫含む)
 - 7 10YR4/6褐色 砂混じり粘質土 (5層より粗砂)
 - 8 7.5YR4/4褐色 砂質土 (やや水分含む、φ2~5cm次の礫含む)
 - 9 7.5YR3/2黒褐色 砂質土 (水分含む)
 - 10 7.5YR4/2灰褐色 砂質土 (やや粘性あり、大礫多く含む)
 - 11 10YR3/4暗褐色 砂質土 (水分含む)
 - 12 7.5YR3/2黒褐色 砂質土 (やや粘性あり、水分含む、φ2~8cmの礫下方に含む)
- 縮尺は平面・断面とも1/100



写真図版

A. 菌場堤跡

第1調査区……………P L . 4・5

第2調査区……………P L . 6・7

遠望・参加者・遺物…P L . 8

B. 矢落遺跡

遺構……………P L . 9



第1調査区（西より）



第1調査区 東壁



第1調査区 (東より)



第1調査区 西壁



第2調査区（東より）



第2調査区 西壁



第2調査区 (西より)



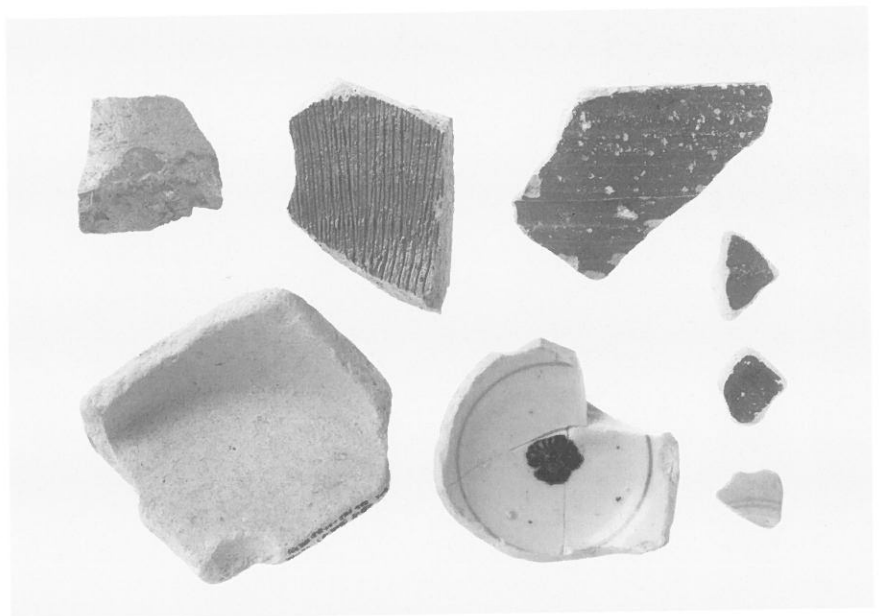
第2調査区 東壁



調査地から小倉方面を望む



調査参加者



出土遺物

PL. 9 完掘状況と土層断面

矢落遺跡



完掘状況（南より）



完掘状況（北より）



土層断面（北東より）

報告書抄録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ だいななじゅういっしゅう
書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第71集
副書名	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第71集
編著者名	横田真吾
編集機関	宇治市歴史資料館
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1
発行者	宇治市教育委員会
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33
発行年月日	西暦2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	調査原因
藪場堤跡	横島町外 月夜地内	26204	81-2	34度 53分 47秒	135度 47分 34秒	20071204) 20071225	138㎡	道路建設
矢落遺跡	宇治蔭山 10-1	26204	113	34度 53分 28秒	135度 47分 30秒	20070703) 20070710	58㎡	保育所 建設
所収遺跡名	種別	主要時代	主要遺構	主要遺物		特記事項		
藪場堤跡	堤防	桃山	堤防跡	陶器・磁器				
矢落遺跡	集落	平安	土坑	土師器・磁器				
所収遺跡名	成果要約							
藪場堤跡	洪水による土砂堆積層の下に損壊した状況の藪場堤を検出した。							
矢落遺跡	折居川の流路変更に伴う地形改変の痕跡と土坑を1基検出した。							

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第71集

発行日 2008年3月31日

発行者 宇治市教育委員会
〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33

編集 宇治市歴史資料館
〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1

TEL 0774-39-9260

FAX 0774-39-9261

e-mail shiryoukan@city.uji.kyoto.jp

印刷 有限会社 ヤマシロプリンティング
〒611-0014 京都府宇治市明星町2-6-97

